



国鉄労働組合
長野地方本部
長野市中御所3-2-22
発行責任者 諏訪 浩一
編集責任者 大日方克利

2017年12月19日
第1539号

一人一人の行動が
組織を動かす大きな力に



謹賀新年

組合員・御家族の皆さん、
新年明けましておめでとう
ございます。この一年が、
皆様方にとって健康で幸多
き一年となることをご祈念
申し上げます。

私たち国労の喫緊の課題
は組織拡大です。昨年は、
2名の組織拡大がありました。
しかし、厳しい状況が
続いています。この一因に
は、分会活動・分会機能の
低下があるのではないでしょ
うか。この間の取り組みに
おける経験と成果は、組合
員それぞれが認識してい
らうと思えます。一つの
取り組みや一つの闘い、行
動で周りの仲間が国労加入
を決意するものではありません。
職場での「世話やき」
活動や仕事上での信頼を得
る、日常の関わりのおかげで
拡大に結び付いてきている
事が報告をされています。
そうした日常の努力や組
合員の意識を組織的なもの
にするためにも、分会や班
を如何に整備し、活性化す
るか、組織拡大の結果にこ
だわるために各級機関役員
の取り組みが問われています。

組織拡大の取り組みに組
織の存亡がかかっていると

の認識で、地本・支部・分
会・班が組織的行動をして
いなくてはなりません。
組織拡大は、「諦めたとき」
「もう無理だと思った時」
が終わりだと言われます。
諦めずに、必死になつて取
り組みをしなければなりません。

労働条件改善の闘いと、
安全安定輸送の確立につい
てでありますが、国労は少
数組合に陥っているとはい
え、職場での声や要求を的
確につかみ、その改善に取
り組む姿勢を貫く、国労運
動の伝統と経験を持つ私た
ちだからこそ、実態に基づ
いた主張や要求が出来るこ
とに確信を持ち合いたい
と思います。しかし、そこだ
けに止まっていたのではあ
りません。労働条件改善の
取り組みは、JRグループ
で働く労働者全体の「底上
げ」という観点で、関連労
働者の労働条件引き上げと
言う課題も国労として負っ
ていることも事実です。関
連労働者の組織化という取
り組みと合わせて、国労全
体で労働条件の底上げを目
指す取り組みも進めていか
なければなりません。

JRグループでは、JR
本体のあらゆる部門での業
務委託が進められる一方、
労働条件が切り下げられ、
要員が足りない、年休が取
りづらい、など我慢と不満
が蔓延している実態も明ら

かになっていきます。急激な
労働人口の減少を本業業務
のスリム化と業務委託によ
るコストダウンで乗り切る
うとするJRグループ全体の
経営姿勢が、安全を脅か
す様々な事故や輸送障害を
発生させている状況を改善
していかなくてはなりません。

「仕事・安全総点検運動」
を通して職場の問題や要求
を集約し、団体交渉を中心
に、現場長との話し合いな
ども取り組みながら職場要
求解決を求める運動の強化
が必要です。そして、職場
で目に見える国労らしい運
動を展開し、組織拡大につ
なげるために、全組合員の
奮闘を要請すると共に、地
本執行委員会がその先頭に
立って奮闘する決意を申し
上げ、新年のあいさつと致
します。

国鉄労働組合長野地方本部
執行委員長 諏訪 浩一



【訂正とお詫び】前号で表題マラソン大
会4連覇とありましたが、5連覇です。
訂正しお詫びします

小林信五さんよりカンパのお礼状が届きましたので掲載します

十一月十六日に兵庫医科大学病院にて悪性胸膜中皮腫の手術を受けました。前段での抗がん剤治療を受け、手術前検査により手術可能の判断(十一月一日)がされました。

手術に対する怖さ・痛さが頭をよぎり、何度も「手術やめようかなあ」というか気持ち、頭を支配しはじめました。そうした中、この手術を受けたNさんの話を聞くことができました。Nさんも「手術に対して、怖さ・痛さがあり、うつにもなった。しかし、手術を受けて良かった。だから今の自分がある」と聞いて勇気づけられました。

手術の前日、医師からはリスクの話⇨合併症による死亡率5⇨10%。術後の肺炎等の危険性。を何度も聞かされると、手術をやめたい気持ちがでてきました。自分の中には「どうせ延命手術だけでしょ?」と思っ

国 労 長 野 地 本 の 仲 間 の 皆 様 へ

ていしましたが、最後に「根治の手術」と言われ「根治とは完治のことですか?」と聞き直してしまっまうほどでした。「そうとらえてもらってもいい」との返事が返ってきました。た。「生きられるんだ!!助かるんだ!」涙が出てきて妻と二人でしばらく医師の前で泣いていました。そして「手術を受けよう!」と決意しました。

手術は、通常10時間⇨11時間かかるところ8時間での終了。家族は開けたけどやはり進行が早く途中で終了したのではないかと不安に思ったとのことでしたが、膜の石灰化もなく、思った以上に順調に進んだと医師から説明されたとのことでした。

私は、麻酔から覚めた時「勝ったんだ!」と叫んでいたとのことでした。手術の内容は「胸膜全摘出・肺膜全摘出・心膜摘出」また、肋骨1本を切除されました。術後も順調で経過も良く、十二月一日に退院となりました。十二月十三日の一ヶ月健診でも良好とのことでした。しかし、長く歩いたり階段の昇りでは息切れがします。多くの仲間の皆様から貴重なカンパや色紙を頂き勇気を・生きる力を与えてもらいました。

十二月十九日自宅で、療養していると長野労基署から簡易書留が届き

ました。十二月十五日付で労働者災害補償保険、療養・休業補償給付等支給決定通知と書かれた紙が入っていました。事実上の労災認定を勝ち取りました。これもひとえに神奈川職業病センターの池田さん、地本を始め各機関の役員・分会の皆様。そしてなによりも多くの組合員の皆様のおかげと思っています。

翌日の20日には、そのあと長野労基署に行きました。

監督官から「JR本社・長野支社ともに覚書を前面に出し、最後まで証明拒否を続けていた」「最終曝露は平成十一年で判断した」「労基署として判断していくことを会社に伝える」「小林さんの石綿の曝露歴について支社はJRになってもあると。本社は不明とのこと」給付金については「現職であるとのこと判断した」以上のことが話されました。

こんなに早く、認定して頂いたことに涙が出ました。心からお礼を申し上げます、地本に戻り二十一日の東日本本部と本社との団交の打ち合わせを行いました。

二十一日の団交で本社は、休業補償の二割分の支給と待期間分を支給すると回答したとのメールが徳武工作事務局長より届きました。

今月二十八日からまた抗がん剤治療が始まります。辛い、きつい副作用と闘わなければなりません。

今後は、特健の内容の向上(レントゲンからCT撮影PET撮影へ)石綿従事者全員の職歴書の作成、退職者の健康手帳の取得と健診への呼びかけ等があります。

今日まで、支援頂いたことに対し心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

二〇一七年十二月二十一日

小林 信五